

# 英語の現在進行形と西洋哲学

加藤 典子\*

English Progressive Form and Western Philosophy

Noriko Kato\*

The main purpose of this paper is to maintain the necessity that teachers of English should teach English grammar to Japanese students, by relating to Western philosophy. Because it is one of the most intricate concepts of English grammar, I will focus on the progressive form in this paper. Almost all of the students can easily understand how to use the progressive form for expressing continuous action or incompleteness, on the other hand, it is actually very difficult for them to understand the 'furate progressive'<sup>1</sup> use, that is, the way of expressing the near future by using the progressive form of the present tense. The reason why Japanese people can hardly comprehend how to use the furate progressive is that they don't know Western philosophy or the Western way of thinking which is hidden under the English progressive form. Therefore, it is significant to teach some of the precepts of Western philosophy along with the English progressive form.

## 1. Introduction

### 1.1. 目的・概要

本稿における目的は、英語の現在進行形という文法項目を取り上げ、特に、日本人英語学習者がわかっていない、'英語の現在進行形でちょっとした近未来も表現出来る'という側面に焦点を当て、何故、現在進行形であるにも関わらず、現在の事のみならず近未来の予定まで表現できるのかという事を、西洋哲学・思想との関わりで説明する事により、いかに、うまく、分かり易く日本人英語学習者に教授出来るかを追究することである。

また、何故ここで、英語の現在進行形という文法項目を取り上げるかということ、実際に英語教育の現場に携わっている一員として、学生達は、現在進行形という文法を簡単にわかっていない、実はその奥深さ・難しさをわかっていないという現状を痛感し、英語の現在進行形をより分かり易く、より良い方法で教える必要性を感じ取ったからである。特に、英語の現在進行形でちょっとした近未来の予定を表せるという点は、なかなか学生達に理解してもらえない事は少なく、少しでも未来であることは、必ず、will か be going to を使った形でしか表現出来ず

に終わってしまう学生が多い。又、will や be going to だけでなく、現在進行形の近未来用法<sup>2</sup>を使えるようになったとしても、will や be going to を使って近未来を表す場合と、現在進行形を使って近未来を表す場合の違いを理解していない為に、間違った現在進行形の近未来表現を使ってしまう学生も多い。このようなことから、現在進行形の近未来用法をより良く学生に教授していく方法を追究する重要性・必要性がおわかり頂けると思う。

これだけ重要で複雑な文法事項であるにも関わらず、英語教育においては、現在進行形(特に近未来用法)はあまり時間をとって正確に強調して教えられないことがない。勿論、現在進行形の教え方として、最初に最も重要である「行為が正に現在、進行している場合に、動詞+ing という形で表現する」という事は長時間かけてしっかり教えるが、これに対して、「人間が主語で、未来を表す副詞を伴う場合は、近い未来を表すことが出来るという『未来を示す進行形の用法』もある」という側面は、最後に付け加えるように簡単に説明するだけで終わってしまうことが多いように思われる。故に、当然、以下の2つについても説明しないままに終わってしまう：何故、現在進行形という形であるにも関わらず、先の予定まで表現出来るのかという理由。

\* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師  
2003年9月10日 受理

近未来用法と言っても、現在進行形で表されるものは、これから先にどうなるかはっきりとはわからないという単なる不確定な近未来ではなく、絶対に行われる確実な予定のみである点。このような大事な2点が正確に教えられていないが故に、いつまで経っても、学生達に、現在進行形の正しい近未来用法は身に付かない。

このように、前段落の の点がうまく説明されていない現状を克服する為に、本稿では、英文法に深く根付いていると考えられる西洋哲学・西洋思想に焦点を当てる。つまり、何故、我々日本人には現在進行形の近未来用法がなかなか定着せず理解されにくいのかと言えば、現在進行形の近未来用法に秘められている西洋独特の哲学や西洋的発想が、日本人にはあまり把握されていないからである。具体的に言えば、西洋哲学の考え方の以下の2点が現在進行形の近未来用法と関連していると本研究では仮定する:1. 未来に対する不安の解消をテーマとして掲げてきた哲学、2. 物事の真偽にこだわり真実を追究する哲学。前者を把握すれば、前段落の問題点を理解しやすくなり、後者を把握すれば、前段落の を理解出来るようになる。これらの詳細は3章で説明する。

英語の現在進行形と西洋哲学を通して主張したいのは、英文法を教える際に、文法事項を実用的で身近な日常会話的な例文を使って細かく教え、沢山文法問題を解かせて身に付けさせるだけではなく、教えるとする文法事項の根底にある西洋哲学や西洋的発想にまで掘り下げた説明も付け加えておかないと、学生達の深い理解は得られないであろうということである。つまり、言語(日本語と英語)の表面的な違いを教えるだけの教育ではなく、哲学や文化の違いまでも含めた奥深い英語教育が必要なのである。

## 1.2. 構成

本稿は以下のように構成されている。2章では、日本人英語学習者がいかに英語の現在進行形近未来用法に馴染めていないかを紹介しておく。特に、2.1. では現在進行形の近未来用法とは正確にはいかなるものかを詳しく説明し、2.2. では、何故いつまで経っても日本人英語学習者は近未来用法に馴染めないのか原因を探り、2つの問題点を掲げる。

3章では、2章で取り上げられた問題点を解決すべく、現在進行形近未来用法の根底に潜んでいると筆者が仮定する西洋哲学を導入する。3.1. では、未来への不安を解消すべく登場した西洋哲学の流れを古代から近代まで時代を追って紹介し、最終的には近未来用法との関わりを探る。3.2. では、真偽にこだわる西洋哲学を古代・中世・近代という流れで紹介し、それらと近未来用法との関係を仮定する。そして、4章において、3章で仮定された近未来用法と西洋哲学の関係を基調とした、より充実した現在進行形の指導法を提案する。最後の5章に結論を導く。

## 2. 現在進行形近未来用法と日本人学習者

この章では、最初に英語の現在進行形とはどのようなものであるのかを2.1.で詳しく紹介し、2.2.では、学校での教え方や英文法参考書にはどのように記されているかを示しながら、従来の現在進行形近未来用法の教え方の問題点を指摘しつつ、いつまで経っても日本人学習者が近未来用法に馴染めない原因を探る。

### 2.1. 現在進行形の近未来用法

この読者の方々だったら、英語の現在進行形について例文を挙げながら説明せよと言われたら、どうするであろうか? 実際は大きく分ければ2つの用法があるのだが、まずは、きっと以下の(1)のような例文を挙げて、正に現在、ある動作を進行している最中である状況が、主語+動詞+*-ing*の形で表される、という1つ目の用法を誰でも説明することが出来るであろう:

(1) I am eating dinner with my friends.

(1)の例文を使って、正に友人達と夕食を取っている最中であるという状況を現在進行形で表しているという事を問題なく説明出来ると思われる。ところが、以下の(2)の例文のように、現在進行形を使って未来時の予定まで表せるという、2つ目の近未来用法まで詳しく説明出来る方は一体どのくらいいらっしゃるであろうか?

(2) I am eating dinner with my friends tonight.

(2)では、現在進行形を使うことにより、今夜はお友達と一緒に夕飯を食べる予定である、という状況を表せる、つまり、近未来の予定を表せる用法である。(1)と比較すれば、'tonight'があるか否かという本当に些細な違いがあるだけの両者であるが、(2)の'tonight'のような未来時を表す副詞的修飾語句を伴うことによって、これから先に～をする予定であるという近い未来を現在進行形で表す事が出来るのである。

英語に詳しい方であれば、上述のような2つ目の用法の説明まで出来るかもしれないが、この近未来用法は、未来形の will と同じような単なる近未来を表す用法ではない事まで説明するのは困難であるに違いない。つまり、未来時を表す助動詞 will を使った場合との決定的な違いにまで繋がる、現在進行形近未来用法の重要な特徴は、これから先に～するかもしれないし、でも場合によってはしないかもしれない...というような不確かな未来を表す(これは助動詞 will の場合)のではなく、必ず、100%実行する予定しか表せない事である。故に前記の(2)の例文では、まだ、先の予定なので本当に友達と夕食を取るのかどうかははっきりわからない、もしかしたら夕食は取らないかもしれないという解釈は絶対に成立しない。つまり、話者が I am eating...と口に出したら、その話者の中ではもはや近未来の予定ではなく、口に出した時点で既に、必ず実行するという現実になっており、余程この発話をしてから夕食までの間に突然交通事故に遭う等の緊急事態がない限り 100%実行されるという確かな予定しか表せないのである。具体的に例文を使って、助動詞 will と現在進行形近未来用法の違いを説明すると以下のようになる：

(3) I will eat dinner with my friends tonight,  
but I may not actually eat it with my friends.

(4)\* I am eating dinner with my friends tonight,  
but I may not actually eat it with my friends.

(3)のように、先はどうなるかはっきりわからないという不確定的な助動詞 will を使えば、今夜友達と夕食を取るかもしれないし、取らないかもしれない、

という表現も可能になるのだが、(4)のように、現在進行形を使うと'I am eating dinner with my friends tonight'までを発話した時点で、この内容は必ず今夜実行され現実のものとなるという確定的な予定しか表せない為、'but I may not...'のような、でも、そうはしないかもしれない...という予定を否定する内容の物とは両立せず、(4)の文章は成り立たない。

以上のように、現在進行形の近未来用法といっても、同じく未来時を表す助動詞 will とはかなり違った種類の近未来しか表せないという意外に難しい用法であるにも関わらず、次のセクションで示すとおり、英語教育の現場では、「英語の現在進行形で近未来も表せます」という非常に簡単な説明で終わってしまう為、上述のような特徴をほとんどの学生は理解出来ずに、近未来用法を正しく使えない。

## 2.2. 近未来用法に馴染めない日本人英語学習者

ここでは、前セクションで詳しく紹介した現在進行形の近未来用法が学校ではあまり正確に、そして強調されて教えられる事が少ない為、また、英文法参考書等でも簡単な説明しか成されていない為、そこから生じる教え方の問題点を明らかにし、何故日本人学習者が近未来用法に馴染めないのか、原因を探る。

今の学生はどうかと言えば、大学生達に英語のライティングで確かな予定を表したい時に、現在進行形を使っているかという決してそうではない。やはり、未来を表す助動詞 will しか使いこなせないのである。このこと自体、中学・高校で、現在進行形の近未来用法が時間をかけてきちんと教えられていない証拠であり、また、教科書や文法書等を見ても、進行形・進行相の文法項目には、せいぜい、「現在進行形を使って、近未来も表現出来る。例えば、I am leaving tomorrow.」等のような書き方がされている程度で、前セクションに記したような細かい厳密な説明はされていない。実際に、高校や大学の英文法の授業で使われる事がある、安井稔の「A Shorter Guide to English Grammar」という英語の文法書には、現在進行形の近未来用法に関して、以下のようほんの数行を割かれているに過ぎない：

(5) 動詞の現在進行形も、近い未来を表すこと

がある。通例、人間が主語で、未来の時を表す副詞的修飾語句を伴う。

*I am taking her to the Zoo this afternoon.*

*She is leaving by the three o'clock train.*

*We are eating dinner with my parents*

*tomorrow.*

(安井 1985: 137)

これだけでは、当然、現在進行形の近未来用法では、助動詞 *will* のような不確定な未来ではなく、必ず 100% 実行する確かな予定しか表せない、という大事な要素が全く伝わっていないので、この用法を正しく使いこなせるようになる為には、このような文法書を読んだだけではほとんど不可能である。

また、日本人英語学習者が、なかなか現在進行形の近未来用法に馴染めないもっと根本的な理由として、その教え方のみならず、そもそも日本語にそのような文法が無いので直感的にピンと来ないという事も挙げられる。英語では、*"I'm eating dinner with my friends tomorrow night."* と言えても、日本語では、いくら先の確実な予定だからと言っても、以下のように日本語の現在進行形では、

(6)\* 私、明日の夜、友達と夕飯を食べているところなの。

とは言えない。日本語の現在進行形でも英語と同様に近未来を表せるという用法があるならば、英語の進行形の近未来用法もすんなり習得出来るはずであるが、そのような用法は日本語に無いので、いくら近未来用法を習っても、いつまで経ってもピンと来なくて当然である。

要するに、日本人には感覚的にもわかり辛い用法であるにも関わらず、特に強調して教えられることもなく、また、教えたとしても、せいぜい、英語の現在進行形で近未来も表せませ、という簡単な説明で終わってしまう為に生じる問題点は以下の2つである： 何故、現在進行形という形であるにも関わらず、先の予定まで表す事が出来るのが説明されていないので、いつまでも理解出来ない。「近未来」を表せると説明されてしまう為、*will* との区別が付かず、いつまでたっても「必ず 100% 実行する確定的な予定」を表すのだということが理解され

ない。究極的には、これら と についてが教育現場あるいは文法書等でしっかり説明されていないが故に、いつまで経っても日本人英語学習者は、現在進行形の近未来用法を正確に習得出来ずに終わってしまうことが多いのである。

上述の と をしっかり学生に授業中説明する、或いは、文法書に記すには、一体、英語話者達のような考え方・発想が英文法に反映されているのかという、英文法の背後に隠されている西洋哲学・思想をひも解かないとより良い説明方法は浮き彫りにはされてこないのである。

### 3. 近未来用法と西洋哲学

日本人英語学習者がいつまで経っても近未来用法に馴染めない原因として、2章で問題提起された2つは：

何故、現在進行形という形であるにも関わらず、先の予定まで表す事が出来るのが説明されていないので、いつまでも理解出来ない。

「近未来」を表せると説明されてしまう為、*will* との区別が付かず、いつまでたっても「必ず 100% 実行する確定的な予定」を表すのだということが理解されない。

ということであった。この2つをうまく説明する為には、ただ、英語の現在進行形の近未来用法の例文をいくら沢山並べて眺めてみても名案は浮かんできはしないのだ。勿論、おわかりのとおり、英文法は今から数年前に突然自然発生的にポーンと生まれて来たわけではなく、古代からの西欧人達の考え方や発想や思想が知らず知らずのうちに文法に組み込まれて、決まったパターン・ルールがいつの間にか英文法として確立されて発話されるようになったものである。

そこで、上記の の2つの問題に関連していると考えられる西洋哲学は以下の3.1.に示すような未来を恐れるような不安からどう救済すればいいかをテーマとして考える哲学と、3.2.で述べられるように、真偽にこだわり続けた哲学であると仮定すると、 と を克服出来るより良い指導へと繋がるのである。

### 3.1. 不安からの救済をテーマにした哲学

このセクションでは、上に記した の問題( 何故、現在進行形という形であるにも関わらず、先の予定まで表す事が出来るのか )を、不安からの救済をテーマにした西洋哲学に関係させて説明することを試みる。

西洋哲学において、苦悩や不安から逃れ、先行き不安な状態から解消されたいとする思想が、いかに古代から近代まで貫かれているかを概観する為に、時代の流れを追って、紀元前の神話・予言文化と、中世を一世風靡したキリスト教神学と、キリスト教衰退後の近代ニーチェ哲学を取り上げる。そして最終的には、これらの思想・哲学と、現在進行形近未来用法との関わりを仮定していくことにする。

#### 3.1.1. 神話・予言文化

紀元前6世紀頃から始まったとされている西洋哲学の長い歴史において、人間は未来を恐るべきものだと考えている、と明確に主張し掲げている思想・哲学・文化は無い。しかしながら、根底にはそのような考え方が流れているだろうと仮定せざるを得ないのは、西洋哲学が始まる以前の紀元前から伝わるインド・ヨーロッパの人々による神話や予言文化に始まり、近代に至るまで、不安からの救済の為に生まれた思想・哲学が多いことからわかるのである。

最初に、インド・ヨーロッパ種族がこの先どうなるかわからない不安を解消したいと紀元前に考えていただろうと仮定出来るのは、紀元前に神々を祭る神話や予言に頼る文化が花盛りであった事にある。この事は、以下の、ヨースタイン・ゴルデル ( 1995 )からの神話や予言の文化に関する2つの引用により、より明確にわかるであろう：

「インド ヨーロッパの ( 中略 ) どの文化も、世界を善の力と悪の力がはげしくせめぎあうドラマとしてとらえる、という点だ。そのためインド ヨーロッパの人びとは、なにかと言えば世界がどうなるのかを予言によって知ろうとしたのだ。」 ( 1995:196 )

「インド ヨーロッパの人びとは、世界のなりゆきの見通しを手に入れようとした。そう、イ

ンド ヨーロッパのすべての地域で、『見通し』とか『知』とかの特定のことが、文化から文化へ、追究されたとすら言っている。」

( 1995:197 )

つまり、紀元前の人々は、未来の事を、これから先どうなるかという事 ( 具体的に言うならば、戦争に勝てるかどうかとか、五穀豊穡になるかどうか等等 ) を恐れ、心配するあまり、神話に出て来る神々の予言に頼って、いち早く先のことを知っていたい把握していたいと常々考えていたことが仮定出来る。

以上は、世界を神話や予言でとらえようとしていた、西洋哲学が始まる以前の時代であり、西洋哲学とは無関係に思えるであろうが、これら、神話や予言の文化が、西洋哲学 ( 神話に登場する神々によってではなく、もっとはっきりした形で世界を捉え直す ) を生み出すきっかけ・原動力になっていたという点で、西洋思想を考える上で見過ごす事の出来ない時代である。

#### 3.1.2. キリスト教神学

前セクションで見た紀元前の神話・予言文化に続いて、紀元後にヨーロッパを覆い尽くす思想・哲学として君臨したのは当然キリスト教神学である。イエス・キリスト誕生以降でも、ヨーロッパの人々の心から恐れている未来への不安は消えず、その解消法として、キリスト教にすがった事が仮定出来る。イエス・キリストの教えは、以下のゴルデル ( 1995 )からの2つの引用にわかりやすくまとめられている：

「イエスは、神の国とは隣人への愛だと説いた。弱い者へのおもいやりだと、過ちを犯したすべての人を赦すことだと説いたんだ。」

( 1995: 204 )

「イエスは、( 中略 ) 全財産を遊びうかれて使い果たしてしまった浮浪者も、お金を着服した悪徳収税吏も、神に立ち帰り、赦しを乞いさえすれば、神の前で義の人と呼ばれる、と言った。神の慈悲はそれほど大きいのだ、」

( 1995: 205 )

人々が上記のようなキリストの教えに惹かれたのは、自分の苦しい忌まわしい過去から逃れて過去を忘れてしまいたいからだと考えるのが当然である。しかし、突き詰めて考えると、つまり、何故自分のよろしくない過去から解放されたいのかと言えば、やはり、過去に悪いことをしたり罪・過ちを犯したりしていると、やがては罰が当たり、明るい良き未来が自分にはやってこないのではないかと未来を恐れているからであると考えられる。

要するに、3.1.1. で見た紀元前に予言にすぎた文化と同様、紀元後になっても、未来に対する不安の解消の為にキリスト教に頼ったわけである。このように、先行き不安な状態をどのように救済するかが常にテーマとなって、いかに西洋思想史に深く関わってきただけかをおわかり頂けると思う。キリスト教衰退以後、つまり近代では不安の解消というテーマはどうなっていくのか、次のセクションで見ていく。

### 3.1.3. ニーチェの哲学

未来を不安に思う状態から救済されたいとする傾向は、近代科学の発達により神の存在が危ぶまれ、キリスト教が衰退した近代においても、消える事は無い。キリスト教衰退後、ヨーロッパの人々はこれから何を心の支えにし、何を信じて生きていけばいいのか、信じられる神も思想も何も無いというニヒリズム(全ては無意味であるという考え)に襲われ、また、これから先どうしたら良いのだろうという未来に対する不安を感じるようになる。

19世紀の哲学者ニーチェは、キリスト教に取って代わる近代哲学・科学すらヨーロッパを覆い尽くしたニヒリズムから人々を救済する事が出来なかったのは、以下の竹田(1994)からの引用に見られる理由からだとして鋭く指摘した：

「ヨーロッパに『ニヒリズムの到来』ということが起こるが、しかしその理由は単に『神』が死んだということに還元できない。神学的世界像の代わりに登場した、哲学や科学という近代的思惟そのものの中にニヒリズムの本質が存在するのである。」 (1994:122)

これはどういう事かという、近代哲学では、キリスト教の神に取って代わる「真理探究」に全力をあげたのだが、近代哲学の「真理探究」という概念もただ神学的なベールが剥がされただけで、「どこかに『ほんとうの世界』があるはずだ、どこかに『完全な世界』、『矛盾のない世界』があるはずだ。(竹田 1994:115)」という、完璧な世界・理想を求めてしまうものであり、肝心な矛盾・苦悩だらけの厳しい現実から目を背け逃げている事には変わりなくニヒリズムを克服出来ていないと、ニーチェは考えたのである。つまり、近代哲学・近代科学も所詮、キリスト教とは別の形をした一種の虚しい信仰にしかすぎなかったということである。<sup>3</sup>

かくして、これから先もずっとニヒリズムに襲われるかもしれないという未来への不安は近代哲学や科学によってもなかなか拭い去ることは出来ず、近代の西洋哲学の根底にも、常に将来・未来への不安が流れていた事は否めない。

### 3.1.4. 不安解消哲学と近未来用法

上記のように、古代から近代まで通して、人々はこれから先どうなるのかわからない未来への不安を抱えて生きていて、いかにその不安を解消すべきかというテーマが西洋哲学の根底には流れているかがおわかり頂けたと思う。

早速、2章で挙げた1つ目の問題点：何故、現在進行形という形であるにも関わらず、先の予定まで表す事が出来るのかが説明されていないので、いつまでも理解出来ない、という事をこのセクションでは西洋哲学と関係させて説明することにします。

上述の未来への不安を解消していきたいという西洋独特の考え方が、現在進行形近未来用法とどのように関わっているかについては：未来という不安から逃れる為に、出来れば、不安な未来というものを現在の延長線上に取り込んでしまい、確かなものとして表現してしまいたいと考え、この考えが、近未来の事でも現在進行形で表現してしまうという英文法に徐々に長い年月をかけて組み込まれていったと、仮定すれば良いのではないかと考えられる。

また、英文法の発達という歴史的観点から見ても、古代から近代までの長い西洋哲学史全てが英文法に影響を与えている事は明らかである。現在進行形 (be+ing) が他の時制 (現在時制や過去時制) とは

別のものとして独立して確立・発達し始めたのは、1300年頃から<sup>4</sup>であるが、I am eating dinner with my friends tonight. のような近未来用法が登場したのは1900年代から<sup>5</sup>である。このように非常に新しい用法なので、1900年代以前に遡り、様々な西洋思想・哲学の影響を多分に受けて、前段落に述べたように、現在進行形の近未来用法という英文法に深く関わってきたと考えて良いのではないだろうか。

### 3.2. 真偽にこだわる哲学

ここからは、2章で取り上げた近未来用法に関する2つの問題点の（「近未来」を表せると説明されてしまう為、willとの区別が付かず、いつまでたっても「必ず100%実行する確定的な予定」を表すのだということが理解されない）の方についてを、真偽にこだわる西洋哲学と近未来用法を関係させる事によって解明する。

西洋哲学の大きなテーマとして、古代から近代を通じて、いかに真偽にこだわり、真実・真理の追究が軸になっているかという事を、3章と同様、古代・中世・近代の3つに区分して最初に説明しておく。

#### 3.2.1. 古代ギリシア哲学誕生

西洋人達がいかに真偽にこだわり、真実・真理を追究したいとする気持ちが強かったかは、古代ギリシアにおいて哲学が誕生した事そのものによって十分に示される。3章でも紹介したように、紀元前6世紀頃の哲学誕生以前は、沢山の神々を登場人物とする神話・伝説によって、世界を捉え説明していた。ところが、ミュケナイ文明の崩壊という暗黒・激動の時代に突入してからは、今までの平和な神話や英雄伝説のような綺麗事では人々は満足しきれなくなってしまったのである。つまり、抽象的な神々の名前は一切使わずに、もっと合理的に世界の全ての現象を捉えて、真実により一歩でも近づきたいという真実追究の歴史の幕開けだったのである。

神話に代わる世界説明を試みた哲学の創始者は、タレスであった。タレスは、『『万物の原理は水である』(万物は水から成る)(渋谷1996)』と説き、より合理的に世界を捉えようとしたのである。その後も、以前の哲学よりもより正確に真実を追究し、より正しい世界観を探求しようと、ソクラテス・プラトン・アリストテレスなど様々な古代ギリシア哲学

者が続出した。

#### 3.2.2. 中世における神の実在大論争

イエス・キリストが誕生した紀元後は、前章でも見てきたように、キリスト教が大いに栄え、沢山のヨーロッパの人々が救世主キリストにすがったのである。そして、世界は神が創造してくれたのであり、神が一番正しい絶対的な存在であるという世界観が人々の間に深く浸透したが、やはり、それで全ての人々が納得したわけではなかった。それは、真実をつきとめたい欲求から、神というものは本当に実在するのか、それともただの名ばかりのものなのかという大論争が中世で繰り広げられることになったからだ。前者の実在論はアンセルムスという学者を筆頭に優勢であったが、徐々に後者の唯名論も14世紀頃のオッカムを中心とした卓越した学者達の台頭により、実在論を脅かし、両者の議論は白熱した。この大論争からもおわかり頂けるように、中世においても、神の実在を巡って真偽にこだわり、真実を解明したいという強い気持ちは色褪せる事は無かった。

#### 3.2.3. 近代哲学の誕生

神を中心とする世界観を徐々にそして決定的に打ち砕いたのは、近代哲学や近代科学の台頭である。それも、世界を正しく捉えて認識したいという、正しい認識・真理へのあくなき追求心ゆえである。正確には、16~17世紀のガリレイの科学革命により、キリスト教に取って代わる新しい科学的な世界観が展開された事や、デカルトにより提唱された新しい学問展開規則(物事を徹底的に疑って、物事の真偽を慎重に判断せよという規則)・数学・代数の発展等により、今までよりも更に正確に、世界や自然現象が捉え直されるに至った。

長い間、キリスト教によって支配されていたヨーロッパが、神学的世界観を捨てて全く別の新しい世界観を持つ程に切り替わって行った事からしても、西洋哲学の真実・真理を果てしなく追究する強い姿勢が十分に窺えると言えよう。

#### 3.2.4. 真偽にこだわる哲学と近未来用法

前セクションまでで、真偽にこだわり続けた真実・真理への追究心が、どれほど強く、西洋哲学を

支え、貫いてきていたかを3つの時代に区分しつつ概観してきた。ここでは、そのような西洋哲学と現在進行形近未来用法との関わりを具体的に仮定していく。

2章後半で取り上げた、現在進行形の近未来用法が日本人英語学習者になかなか理解され辛い理由の2点目として、「近未来」を表せると説明されてしまう為、will との区別が付かず、いつまでたっても「必ず100%実行する確定的な予定」を表すのだということが理解されない」という問題点を挙げた。つまり、(3ページの(4)の例文をもう一度以下に(7)として例示しておくが)以下の(7)のような曖昧な例文が許されないのは、「I'm eating dinner with my friends tonight.」と口にした時点で、余程のアクシデントが発生しない限り絶対今夜は友人と食事をするという確実な予定になっているからである：

- (7) \* I am eating dinner with my friends tonight,  
but I may not actually eat it with my friends.

現在進行形の近未来用法と言っても、もはや、どうなるかわからない曖昧な近未来の事ではなく、必ず現実のものとなる確定的な予定しか表せない、という日本人英語学習者にはわかりにくい感覚を西洋哲学に絡めて次段落で説明する。

前セクションまでで見てきた西洋哲学史を貫いている真実・真理の探究や真偽へのこだわりが、人々の会話レベルにおいても、出来れば嘘や曖昧な事は述べたくない、常に確実な内容・情報・真実を述べていきたいとするように、徐々に影響を与えてきたものと仮定してみれば、うまく説明がつくのではないだろうか。本当にどうなるかわからないあやふやな場合は助動詞 will を使って、曖昧さを含ませて表現せざるを得ないであろう。しかし、それ以外の場合で大体予定がわかっている場合は、たとえ、発話時点より将来・近未来という時制の内容であっても、それはこれから100%確実に行う真実であり、もはや、曖昧な未来の予定ではなく、着々と既に現在から進行している確かな真実として述べようとしているのだ。だから、曖昧な will ではなく、既に現在から動き始めているプランとして、現在進行形を使い、これは近いうちに必ず真実・明らかな事実になるのだという強い気持ちを表現するので

ある。これらのアイデアにより、何故、現在進行形の近未来用法では、100%行う確実な予定しか表せないのかという理由がかなり明らかになったであろう。

3.1.4.でも見てきたように、現在進行形の近未来用法は1900年頃から頻繁に使用され始めたということなので、古代から近代に至るまで、年代を重ねる毎にますます真実・真理を追究して真偽にこだわり続ける意欲が高まってきたその勢いが、現在進行形近未来用法という文法にも組み込まれてきたものと考えられる。「I'm eating dinner with my friends tonight.」と言ったとたん、今夜になったら絶対この内容は真実になるのであり、決してそこに嘘や曖昧さは無いという強い意志の表れなのである。

#### 4. 西洋哲学に基づいた教授法

この章では、2章で提起した現在進行形の近未来用法が日本人に理解されにくい2つの問題点を克服すべく紹介した3章の西洋哲学を基にした新しい教授法を導入する。

英語の現在進行形の近未来用法に対して、我々日本人英語学習者はなかなか馴染めなかった経緯をここでもう一度振り返っておくことにする。日本語には、「～している最中である」という現在進行形を使って近未来の予定まで表現出来るような特殊な文法は無いので、直感的に近未来用法にはなかなか馴染む事が出来ない。詳しく述べると、3章で見てきたような日本の思想史には無い西洋独特の哲学・思想が近未来用法に組み込まれ文化化されて近未来用法に至ったので、そのような思想を持たない日本語において近未来用法が発達するわけもなく、日本語には見られない用法という事でなかなか習得できずに苦労してきたのである。

そこで、西洋哲学史をベースとした英文法である現在進行形近未来用法を日本人の学習者達に教授するには、当然、西洋哲学・思想に触れて西洋独特の発想部分を補っておく必要がある。だからと言って、分刻みで沢山の英文法事項を教えていかなければならない中学・高校・大学の授業中に、のんびり時間をかけて西洋哲学史ばかりを説くわけにもいけなないので、なるべく簡潔に以下のように指導していけば良いのではないだろうか：



- ・現在進行形を導入するにあたって、最初は当然メインとなる進行相の用法を豊富な例文を挙げながら説明する。
- ・2つ目の用法として、必ず100%行う確実な近接未来の予定であれば、近未来の時制を表す *this afternoon, tonight, tomorrow* 等の副詞を伴って、現在進行形でも近未来の予定を表現する事が出来る近未来用法を例文と共に導入。
- ・一方、日本語では、「\*私は明日の夜友達と夕飯を食べている。」とは言えないように、日本語の現在進行形では近未来の予定を表せないから、学生達にもなかなか日本語の直観にはあてはまらない事を実感してもらおう。
- ・同時に、この用法が日本人にはピンと来ないのは、近未来用法には西洋独特の考え方が溶け込んでいるから、西洋哲学史を知らない我々日本人にはわかりにくい事を説明。
- ・西洋独特の考え方の導入：自分がきちんと掌握出来ない予測不可能で不安定な未来を恐れてきた激動の時代の繰り返しだったので、常に確かな1つの真実をつきとめて不安から逃れたいという傾向にあった西洋哲学史。この傾向故に、出来れば、不安な未来というものを未来のまままで放置しないで、現在の延長上に取り込んでしまい、自分が思考している事やこれから先の予定は絶対に揺るがない確実な真実として、正に発話している今現在から進行している確実なプランなので、現在進行形で確実な将来・未来の予定を表現出来ると指導する。
- ・近未来の予定ならば、助動詞の *will* でも表現出来るが、*will* は完全にこの先どうなるかわからない、つまり口にした命題内容を本当に実行するかしないかはよくわからない場合に使われる。例えば、別れ際に *"I'm seeing you again."* と言うよりも *"I'll see you again."* と言う場合によっては、本当にまた会えるかどうかはハッキリわかりません、という曖昧なニュアンスを与えてしまう恐れがある程なので、*will* と現在進行形の近未来用法には、確実性の点で大きな違いがあることを最後に説明する。

時間の許す限り、ここまで丁寧に指導しておかないと、なかなか学習者達の理解は得られないであろう。

また、一見、上記の説明では近未来用法の説明ばかりで、肝心の進行相を表すメインの用法(私は~している最中である)にあまり時間が割かれていないように思えるかもしれないが、そちらの用法は、日本語にも英語の現在進行形に相当する概念があるので、*be* 動詞 + *-ing* という形式さえ教えて沢山例文を読ませたり書かせたりすれば、そんなに無理なく習得出来るので問題は無い。

また、逆にここまで長い時間をかけて現在進行形の近未来用法を丁寧に教えておく必要があるのかと思われるであろう。しかし、上記のような西洋哲学を導入した指導をする事は決して時間の無駄にはならない。何故ならば、上述のような教え方を少しでも取り入れる事により、少なくとも各国の言語というのは文化・思考習慣の反映であり、日本語と英語の間の発想の違いが、日本語と英語のような言語表現の違いとして表れてきているんだと、少しでも認識してもらえる良い機会になるという狙いもあるからである。ただ、機械的に英文法を丸暗記したり、習った文法事項を含む英語の文章をドリル練習で機械的に書かせられたりするよりも、日英の文化や思考習慣の違いを含めて英文法を習う方が、理解度は高くなるはずである。

## 5. 結論

この論文では、日本人英語学習者にとって大変難しいとされる英語の現在進行形の近未来用法という文法項目を取り上げ、何故日本人には馴染みにくいのか原因をつきとめ、それを克服すべくどのように教授したら良いのかを論じてきた。日本語という言葉も日本人独特の考え方や思想の反映であると同様、当然、英語もやはり長い歳月を経て培われてきた西洋哲学・思想が反映されて自然に文法化された言語である。故に、英語の現在進行形という表現形式をとっておきながら、近未来の確実な予定まで表せる近未来用法の背後にも、西洋独特の考え方が潜んでいて当然であり、そのような西洋独特の思想を良く知らない我々日本人にとって、この用法をいくら学習してもピンと来ないのも当たり前である。そこで、日本人英語学習者が特に理解出来ずに苦しんでいた問題： 現在進行形であるにも関わらず近未来の予定を表せる理由がわからない、近未

来の予定といっても必ず100%確実に行う予定しか表現出来ないという理由がわからない、この2つの問題点を克服して、スムーズに近未来用法を教えるには、3章で紹介した西洋哲学史の傾向を交えつつ、不安な未来を現在の延長線上に取り込み、正に現在から進行している最中の確実な真実として表現したい傾向の現れが、現在進行形で近未来の確実な予定なら表現出来ると説明すべきであることを4章で提案した。

また、3章の西洋哲学史では、未来を不安に思う気持ちから解放されたい傾向と、真偽にこだわる傾向という2つを紹介したが、勿論、西洋以外の人々も我々日本人も未来を不安に思ったり、真偽にこだわって真実を突き止めたいという気持ちは持っている、これは全く西洋だけにしかない特別な考えであるというわけではないが、英語の現在進行形という形を持ちながらも近未来の予定まで表現出来るという文法が存在することからして、西洋以外の文化・思想よりも、上述の2つの傾向は西洋においてが大変強い主流なものであったのではないかと考えられるので、本稿を執筆するに至った。

見てのとおり、この論文は、私が仮定した2つの傾向の西洋哲学と英語の現在進行形近未来用法が本当に完璧に関わっていて、この仮定は正しいのかという点や、また、4章で提案した教授法により実際に学生達は今までよりもより完璧に近未来用法を理解する事が出来たのか、というところまで実証するには至らなかった事からして、全く実証的なものとは言えない。しかし、各国の言語の様々な文法や特徴は、その国固有の文化や思考習慣や思想の現われであることには違いないので、英語を教えるのであれば、4章で提案したように西洋独特の発想や思想にも触れながら新しい文法事項を導入することは大変重要なことだと思われる。

## 参考文献

- 1) 渋谷大輔・山本洋一・三森定史・鯖木周見夫 1996 『哲学・思想がわかる』 東京：日本文芸社
- 2) 竹田青嗣 1994 『ニーチェ入門』 東京：筑摩書房
- 3) 中尾俊夫 1979 『英語発達史』 東京：篠崎書林
- 4) 中尾俊夫・児馬修 1990 『歴史的にさぐる現代の英文法』 東京：大修館書店
- 5) 安井稔 1985 『A Shorter Guide to English Grammar』 東京：開拓社
- 6) ヨースタイン・ゴルデル 1995 『ソフィーの世界』 東京：NHK 出版

<sup>1</sup> 'futurate progressive'とは、安井稔編の「現代英文法辞典」の192ページ中に、「未来を表す進行形(futurate progressive)と呼ばれることがある」と記されている為、この文法用語を引用した。

<sup>2</sup> 近未来用法というのは、英文法用語として一般的に使われている名称ではなく、この論文においてのみ、分かり易くする為に使用しているものであり、筆者が独自に作成した語句である。

<sup>3</sup> このようなニヒリズムを克服する為には、不安や苦悩から逃げずに、つまり、宗教や信仰などに逃げ込まずに、苦悩に満ちた生そのものを受け入れ肯定ししみながらも生きて行く事しかないと言っている。

<sup>4</sup> 中尾(1979; 181)によると、進行構文は1300年頃より確立されたと記述されている。

<sup>5</sup> 中尾・児馬(1990; 117)によると、近未来用法が使われ始めるようになったのは、現代英語の時代から、つまり、1900年頃からと説明されている。